



Title	「に」を介する同一動詞反復形式の流動 「いや」から「ただ」へ
Author(s)	山口, 康子
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 25, pp.二三-三三; 1976
Issue Date	1976-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/32461">http://hdl.handle.net/10069/32461</a>
Right	

This document is downloaded at: 2018-02-25T05:18:06Z

## 「に」を介する同一動詞反復形式の流動

——「いや」から「ただ」へ——

山口 康 子

ある一つの表現形式がある表現価値を担いある一つの時代にある一つの様相をもってあらわれてくるということはどういうことなのであろうか。私たちは残された偶然的な資料を通してその様相の片鱗をうかがう。時代を遡れば遡るほど残影はまばらになり、私たちは幻の中からその変遷の全貌を窺いみるほかはない。

中古に例をみることの多い、「に」を介して同一動詞を反復する形式の述部強調表現がある。例えば竹取物語にみる「たてこめたる所の戸、すなはち、ただ開きに開きぬ」（日本古典文学大系本、64ページ。なお以下の引用も特に注しない限り同大系本による。）

の如きであるが、この例にみる如く程度量副詞「ただ」を上接する用例が圧倒的に多い。この場合「ただ」の機能は、直接する「開きに」において結ばれているとすることが現在の大方の見方であろう。

ところで私は、先に『二』を介する同一動詞反復形式の史的考察——今昔物語集まで——（『語文研究』第三十九・四十号、昭五〇・六、以下「拙稿(1)」と略称。）において、この表現形式が中古に入って「ただ」を伴う形式に集中してゆく事実を指摘した。

「に」を介する同一動詞反復形式の流動（山口）

今、必要の範囲で転記すれば次の第一表の如くである。（拙稿(1)第一表・第二表によるが数値は若干補正した。）

通史的にみた場合、右表の表現類型5・6例えば「花咲みに咲む」如きがこの表現形式の原型とみることができ、その成立を上代に特徴的な繰返し法の一環として把握することができる。そのことに関して拙稿「上代における同一動詞反復形式——『に』を介する形式の成立要因について——」（長崎大学人文科学研究報告第24号、昭五〇、以下拙稿(2)と略称）に述べた。

ところでこの「花咲みに咲む」如き表現も中古に皆無ではないが、なお圧倒的に「ただ」を伴う形式への集中がみられること第一表に明らかなる如くである。（詳しくは拙稿(1)参照）この表現形式の中古に見出した全用例一七七例中、「ただ」を伴うものは計一三七例に及ぶのに対し、上代におけるそれは、全三〇例中、万葉集中にみる次の二例が管見の限りの全例である。

。「ただ泊てに御船は泊てむ」（八九四）

。「ただ乘りに妹が情に乗りにけるかも」（二七四九）

しかもこの二例は、二例ともに右にみる如く「に」を介して同一動詞が直上・下接しているわけではなく、いずれも「に」の下に主語・目的語などの挿入があり、形式的にみれば「ただくにく」

★表中○で囲んだ数値は、イヤを伴なう例

第一表

計	III 動詞以外 の反復		II 程度量副詞を もなわない形式				I 程度量副詞を もなう形式		表現類型 例文	作品
	8	7	6	5	4	3	2	1		
	形容詞語幹の反復など		ワラハナキニナキマドフ	ワラハナキニナク	ナキニナキマドフ	ナキニナク	タダナキニナキマドフ	タダナキニナク		
6			6						古事記	日記 謡集 詞命
6			6						日本書	
4			4						代歌	
10			3		3		2	②	万葉	
3			1					②	祝	
1								①	宣	
2				1				2	竹取物語	語語 語語 日記 日記 語語 語子 日記 日記 語語 語子 日記 日記 鏡 上語 覺 物語 日記 日記
1				3					篁中物語	
3				1				1②	伊勢物語	
4				1		1			土佐日記	
2				2					大和物語	
8						3		5	蜻蛉日記	
26						5		18①	落窪物語	
38				2		8		27	宇津保物語	
16		1		1				14	枕草子	
21							1	20	源氏物語	
1								1	和泉式部日記	
1								1	紫式部日記	
2							1	1	大鏡	
28				2				26	栄花物語	
5								5	狭衣物語	
9								9	夜の寝覚	
3							1	2	浜松中納言物語	
2								2	更級日記	
3								3	讚岐典侍日記	
123		5		16		11		91	今昔物語集	参考
11		その他		2		1		8	古本説話集	
20		2		10		3		5	平家物語	

という類型的表現ではない。形式に固執すれば、上代には該当の確例は一例も見出せないことになる。

更に、上代全三〇例のうち、計二〇例までが表現類型5・6型、例えば「花咲みに咲む」の如き類であるところからも、この表現形式の上代から中古への推移は直線的かつ平板なものではなく、それなりに曲折を持った流動の様相が考えられよう。

本稿は先の二拙稿をうけて、かかる曲折した流動の要因を探ること、すなわち、中古「ただ」を伴う形式に著しい集中をみせ、いわば類型化した理由を説明すること、を目的とする。考察

の資料は拙稿(1)に用いたものと同一である。前掲第一表作品欄のとおり、上代は仮名書部分に用例を見出した計六資料、中古は歌集・歌合・歌論書の類を除く散文の計二〇資料(但し源氏物語などの散文資料の中に含まれる和歌は調査の対象としている)である。<sup>(注②)</sup>

二

上代から中古へのこの表現形式の流動の様相にはいくつかの特徴をあげ得るが(詳しくは拙稿(1)参照)もとも目立つ事柄は反復される同一動詞に上接する程度量副詞が、「いや」から「ただ」

へと交替したことになる。<sup>(註⑥)</sup>

上代、この表現形式の「ただ」を直上接する例は、中間項を挿入した形で万葉集に二例をみるのみであること前述の如くであるが、一方「いや」を直上接する確例は管見の限り次の五例が見出される。

- (1) いややせにやす (万八—四六二、家持)
- (2) いやましに恋はまされど (万十一—三二五九)
- (3) いや若えに御若えまし (祝詞・出雲国造神賀詞)
- (4) いやをちに御をちまし )
- (5) いや継ぎに継がむと (宣命第五十九詔)

右用例からも察知し得ることであるが、「いや」は上代すでに接頭語的になり程度の甚だしいことを示して被修飾語に直上接する。又「いや盛栄に」「いやざかる」「いや及く」「いや及及に」など様々な形の複合語や複合副詞句をつくり、「いや」が上代文献においては程度量副詞的な性格を持つ形状言として様々な語につき活発に働らく様相を示す。<sup>(註⑦)</sup>

しかし、かかる「いや」の盛況は上代に限り、中古に入ると「いや」の用例は急激に減少する。当該表現形式に上接する「いや」は前述の中古二〇資料においては次の三例のみを見る。

- ・ 潮のいやましに君に心を思ひます哉 (伊勢33段)
- ・ 思ひはいやまさりにまさる (伊勢40段)
- ・ 雨はいやまさりにまされば (落窪巻一・72ペ10行)

対象とする二〇資料の範囲で「いや」の全例を拾い出してみても、例えば源氏物語には玉かつらの巻に「京の事はいやとをざかるやうにへだよりゆく」(大成本723ペ6行)とあるのが唯一の例で

「に」を介する同一動詞反復形式の流動(山口)

あるし、伊勢物語に五例、落窪物語に二例、蜻蛉日記に一例をみる他は、中古散文資料に簡単に例をみない。古今集にも「いや」は業平(六六四、国歌大観番号、以下同じ)、読人しらず(八一九)、躬恒の長歌(一〇〇五)の計三首にみるのみで、中古にはすでに古語化し、用いられること極めて稀であったと考えてよいことが分る。

以上にみるとおり、上代、「いや」は程度量副詞として相当の盛況をみせてはいるが、その用法は宣命・祝詞など様式的な表現の中で類型化し、固定化していると考えられる。「いや」を伴う同一動詞反復形式は上代すでに生き生きとした叙述力を失ない類型的な慣用副詞句と化して衰弱し、述部強調表現へと強力に展開し得なかつたのであろう。

ところで「いや」に時代を超えて生き続ける力がなかつたにせよ、この表現形式が「いや」を失なう代りに「ただ」を採用し、冠の如くその頭に置かずにおられなかつたのは何故であろうか。それは、「に」によって総括されている部分の持つ修飾性・叙述性の強さによるものと考えられる。

この表現形式の成立については、「に」格を伴なう修飾句の叙述性・指示性が上代の表現法に特徴的な繰返し法とひびき合って同一動詞反復の形式をとり、その力点が反復の方に移った結果、述部強調の表現として成立したと考えた。(詳しくは拙稿(2)参照)

この表現形式は「ただ」などの程度量副詞を伴わない場合、「に」の上・下接部分がともに単一語である形式(例えば「ナキニナク」)、及びともに複合語である形式(例えば「ナキマドフニナキマドフ」)は見出せるし、「に」の上接部分は複合語、下接部分はその第二項の単一語である形式(例えば「ワラハナキニナク」)

は見出すが、その逆にあたる「に」の上接部分は単一語、下接部分は複合語（例えば「ナキニナキマドフ」という形式——前掲拙稿で私は表現類型4と分類した——は極端に用例が少なく、上代・中古を通して次の一例を見出すのみである。

・雪を戴きたるやうなる<sup>註⑥</sup> 姫翁這ヒニ這ヒ来て（宇津保・蔵開上、大系本〔25〕p.5行）

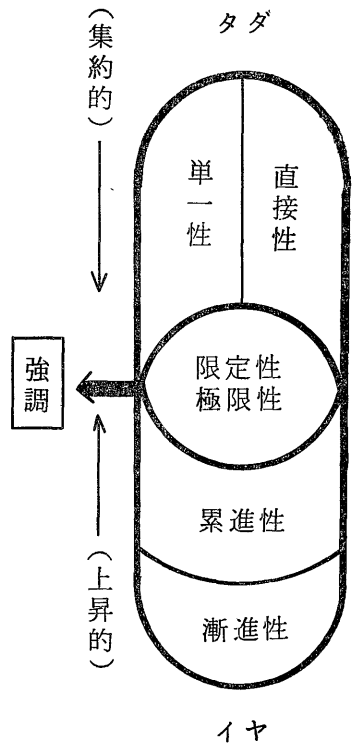
この事實は、この表現形式における「に」の上接部分の修飾限定性・状態指示性の強さのしからしめるところと考えられる。先述の如く拙稿(2)においてこの表現形式は例えば「花咲みに咲む」如きを原型として発生・展開したと考えてみたが、「に」で総括している部分、（例えば「花咲みに」）の持つ状態性の強さ、修飾限定の確かさが、例えば「泣きに泣き惑う」の如き形式への展開を阻み、「に」の上接部分はあくまでも叙述性・指示性を保った状態的表現を維持することに固執せしめたものと思われる。そのため「に」の上接部分は「いや」にしる「ただ」にしるせめて程度量副詞を随伴することによって飾られる必要があり、そこにこそこの表現形式の意味も又存したのである。う。「いや」を失なうからには「ただ」を採らざるを得なかつたゆえんである。

それにしても「いや」から「ただ」への移行がなされ得たのは「いや」「ただ」の間にある程度の共通項がなければなるまい。今、いずれも原則的に被修飾語に直上接するという性格はさておき、意味的な共通項がどこに存するか検討したい。みてきた如くこの移行は上代から中古への時点で行なわれたのであるから、今、便宜、万葉集中の「いや」及び「ただ」の意味内容を検討してみる。

万葉集中の「いや」全一〇一例は意味的に次の三つに分類でき

る。

- (1) 漸進性（いよいよ・ますます）
    - ・相見之妹者弥年放（二二二二）
    - ・累進性（いちだんと・きわめて・たいそう）
    - ・此山乃弥高見之（一一三六）
  - (2) 極限性（もっとも・いちばん・まったく・ほんとは）
    - ・伊夜波都波奈爾佐伎波麻須等母（二〇一四四五〇）
  - (3) 意味もみえ、この極限性はある種の限定でもある。「いや」が上昇的な漸進性・累進性を基底としてその極点に至りつくという形で極限性・限定性を持つことが知られる。
    - 一方、集中の「ただ」全三〇例、「ただに」全四七例、計七七例を同様に検討・分類すると次の如くである。
    - (1) 直接性（直ちに・すぐに）
      - ・之乎路可良多太古要久禮婆（十七一四〇二五）
    - (2) 単一性（わずかに・たった・ほんの）
      - ・我乎待兒等波但一耳（十一一二七五一）
    - (3) 限定性（それよりほかのことなく・もっぱら・いわずに・ひたすらに）
      - ・唯人者舊之應宜（十一一八八五）
- 右により「いや」「ただ」には上代において左図の如き意義的な重なりが生じたものとみられ、このことが接頭語化した「いや」「ただ」が代わり得た理由であろう。



以上の考察により、上代における「いや」の上接が中古における「ただ」の上接へと交替をなし遂げ得た理由は明らかにし得たと考える。

次に、この表現形式が中古において「ただく」の形式で類型化する理由について考えてみたい。拙稿(1)においてはその理由について「タダの語性と共震したためか」という曖昧な表現で述べそれ以上追求しなかった。以下、その点を考察する。

この表現形式を構成する要素は、①反復されている同一動詞、②その中間に置かれている助詞「に」、③上接している「ただ」、の三つである。この三要素はそれぞれどういう語性を秘めて一つの表現形式としてまとまっているかを考えてみよう。

① 同一動詞の反復

同一動詞の反復という形式自体、当然同一動作の繰返しを前提しているわけであり、「繰返す」ことはすなわちもともと原初的な強調の方法である。強調にも様々な方向が考えられるが、この場合それは反復・累加・重加という方向の強調であり、「そのも

「に」を介する同一動詞反復形式の流動(山口)

のそれ自体を反復・累加することを指示する」という性質を持つ。

② 「に」

同一動詞の中間に置かれて両者を接続している格助詞「に」の性格は様々に規定されているが、森重敏氏によれば、「に」助詞の本質は「後行概念を引きつけて其の中に包摂しきる」ところにあると考えられる。「に」は強い指向性を持ち、その意味で係性をも持ち「それそのものを指向して収斂する。」

③ 「ただ」

先に万葉集中の「ただ」を検討したが一般に「ただ」はどのような性格を持つ副詞であろうか。目安として「時代別国語大辞典・上代篇」「日本国語大辞典」の「ただ」の項を参照する。

△時代別国語辞典・上代篇(三省堂)

(イ) まっすぐに・直接に(移動をあらわす動詞を修飾することが多い。)

(ロ) ひたすらに・一途に(動詞の連用形の上につき、動詞の下に二を介して同じ動詞をくりかえす型をとる。)

(ハ) たったそれだけ(助詞ノミを伴った名詞や、動詞、もしくは数詞

「一」を含む名詞を修飾・限定する)

(ニ) まさしく・ほかならぬ(時をあらわす語句を修飾する)

当該表現形式は右の(ロ)に特に項をたてて説明されており、用例として万葉集の八九四・二七四九の二首が示されているが、これは先述のとおり「ただ」を伴う形式の、上代における管見に見出した全例である。

△日本国語大辞典(小学館)

副詞「ただ」は「直」「唯・只」「徒・只」の三項に分けて記述されているが、今問題にしているのは第二項「唯・只」にあつた

る。その項、次の如くである。(傍線・筆者、以下同じ)

Ⅲ (唯・只)

1 それ一つをとりたてて限定する。それよりほかのことなく・もっぱら・いちずに・ひたすらに・ただに

2 事柄の単一さ、数量の少なさを強調する気持を表わす。わずかに・たった・ほんの

3 「ただ十動詞連用形十に」の形でひたすらその行為を推し進めるさまを表わす。あとに同じ動詞をくり返すのが普通。

4 前文に対して例外的にその事柄だけが成り立ったり派生したりする意を表わす。後文の内容全体の成立・派生を示すときは接続詞に近づく。

ここにおいても右3が当該表現形式のために項目として特設され、「ひたすらその行為を推し進めるさま」として累進的な強調表現であることを示している。

右二書によれば「ただ」は一般に何を修飾するかによって、すなわち被修飾語の語性によってその意義内容をかえるが、結局のところ共通項として持つのは「それそのものを直接限定して指し示す」ということであるといえよう。「まさにこれそのもの」である限定・強調する意味である。<sup>(注⑧)</sup>

以上、「ただ」に「形式の三要素についてそれぞれ考察した結果、いずれも各々機能の広がりを持ちながらも「それそのものを指し示す」という点において共通の語性をもっていることが判明した。各々が持つ「それそのものを指向する」性質が共震して一つのまとまった表現形式を成立せしめたと考えられる。

以上、上代においては「ただ泣きに泣く」如き形式の確例を一例も見出さないにも拘らず、次代中古においては著しく類型化し

て現われる、その流動の要因を考察した。「ただ」は「くにく」という同一動詞反復形式とその語性において共震し、接頭語化して力を失なった「いや」に代わって直上接して一つの類型的表現形式を構成し、述部強調表現としての役割を担って「ただひたすらに」「一途に」というニュアンスの中で反復・累加の方向の強調を表現したと考えられる。

### 三

次に、この流動はどのような言語場を背景に行なわれ得たのであろうか。

中古の散文資料にあらわれるこの表現形式の用例分布は、現象としてみる時、落窪物語に至って一つの変貌をみせる如くである。今、地の文・会話文・和歌に分って用例数を示すと、次の第二表の如くである。

既出の第一表とあわせ考えることによって判明する、その変貌の様相は、要するに次の三点であろう。

#### (A) 用例数の増大

落窪物語以前には伊勢物語その他いわゆる歌物語といわれるものが中心をなすなどジャンルとしての問題、又各作品の言語量の問題など考慮すべき点があるが、それにしても落窪物語の計二六例、宇津保物語の計三八例は文字どおりに桁違いの増加であり、一つの変貌を認めざるを得ない。

#### (B) 表現類型の変化

第一表によれば、大和物語までにおいては「花咲みに咲む」如き、すなわち原初的な形態と考えた表現類型5・6型がほぼ半数を占め、いまだ上代的な様相を残存しているかに窺えるのに対

し、落窪物語に5・6型なく、京津保物語には全三八例中三例しか見出されず、5・6型が極めて少なくなっている。

(C) 会話文中の用例の存在

落窪物語に計九例、京津保物語に計一五例を数える会話文中の用例はそれ以前に見出せず、それ以後も源氏物語に一例、栄花物語上に一例、夜の寝覚に三例をみるのみで、院政期の今昔物語集に至っても全一二三例中計六例を数えるのみである。

右三点の中で特に注目すべきは(C)会話文中の用例の存在である。この事実から、この表現形式が一度は口頭語の世界、会話文の世界に属したことを推測することが許されよう。わずかこの二作品に片鱗をとどめるにすぎないにせよ、この口頭語時代を考えると、落窪物語以前の歌物語などに用例の少ないことも、前節で述べた「ただ」との共震も、中間項挿入能力を失ない「に」を介して上・下接動詞が直接する傾向の増大(拙稿(1)参照)も、「のみ」「ばかり」などの副助詞の分出(同じく拙稿(1)参照)も、いずれも納得のいくものとなる。発声するはしから消えてゆく音声言語の世界にあっては、同様な機能をもって相ひきあう「ただに」の各要素が、中間項を排除して直接し、表現形式として類型化・固定化する勢いを持つのも当然であろう。又「ただ」との共震についても、音声言語としての性格——発音しにくい「いや」よりも明るく広い母音を持ち同音反復という単純な性格をもつ「ただ」

第二表

計	地の文	会話	歌	作品	
				古事記	日本書紀
6	3		3	古事記	事紀
6	1		5	日本書紀	書紀
4			4	古代歌	代歌
10			10	万葉集	葉集
3	3			祝宣	命宣
1	1			宣	命
2	2			竹取物語	語語
1	1			篁中	語語
3	3			伊勢	語語
4	3			土佐	語語
2	2		1	大和	語語
2	1		1	蜻蛉	語語
8	8			落窪	語語
26	17	9		津保	語語
38	23	15		宇津	語語
16	16			枕草	子語
21	20	1		源氏	語語
1	1			和泉	日記
1	1			紫式	日記
2	2			大式	部部
28	27	1		栄花	物語
5	5			狭衣	物語
9	6	3		夜の	寝覚
3	3			浜松	中納言
2	2			更級	日記
3	3			讚岐	侍日記
123	117	6		今昔物語集	集語
11	9	2		古本家	話物
20	16	4		平家物語	話物

が採られやすいことから、より納得のいくものとなる。「のみ」「ばかり」などの助詞を分出する用例がみられる点も、「ただ」の係り方に曖昧な性格があることを考えれば口頭語においては一層不明確になりやすく、そのことがこれら限定の副助詞の分出を生じ、かつ、結果的に強調性を強めたと考えられるのではないか。かく、この表現形式の流動には口頭語時代を考えることが妥当と思われるのであるが、具体的にはどのような言語場——時代相が考えられるであろうか。上代においてこの表現形式がどの程度口頭語性を有していたかについては不明とする他はないが、これが歌謡の世界に源を発する気配がみえるところから(詳しくは拙稿(2)参照)、口頭語を通して文学的な昇華・洗練を経て歌謡の中に定着・存在した表現形式と考えてよいであろう。そのまま直線的に文学的な表現として展開し得なかったことについて、私はかの国風暗黒時代と呼ばれる百年余りの時代の存在を考えに入れてみたい。周知のとおり、万葉集中最後の歌は、天平宝字三年(七五九年)のものであるが、その後八世紀後半から九世紀前半には



漢詩・漢文の文献以外の作品が伝えられていない。九世紀後半、小町集・篁集・業平集などの存在が推定され、八八二年、日本紀竟宴和歌成り、八八四年秋には紀長谷雄五百番歌合を皮切りに歌合もしきりに催されるようになり、和歌隆盛の機運の高まりははっきりよみとれるとはいえず、八世紀後半から九世紀へかけての百年余の期間、文章語の世界では漢詩漢文のみ隆盛であったわけで、当該表現形式は口頭語の中でその生命を伝えるほかなかったのではないだろうか。すなわち、歌謡の中で文学的な表現としての芽生えをみせているこの表現形式が漢詩文隆盛の中でその後の文学的定着の方途を見失ない、わずかに口頭語の中で変質しつつ用いられ、伝られてきたと考えられる。

源氏物語においてこの表現形式は作中人物の会話に用いられること少なく、草子地の中に計二〇例が見出された。源氏物語におけるこの表現形式はまず地の文のものと考えられるが、なおこの作品には、あるいは地の文も作者の語りというニュアンスがいまだ失なわれていないのかもしれない。しかし草子地がいかに語りのニュアンスを保つにせよ、地であることに変わりなく、この表現形式の文章語としての偏りはここに固定したのではないだろうか。落窪物語・宇津保物語の用例からみて口頭語の世界に生きていたと考えられるこの表現形式が口頭語と袂を分ち、文章語の世界における一つの述部強調表現として成立するのは源氏物語においての如くであり、それは一般に中古語において源氏物語を境に口頭語と文章語との乖離が始まるとするの軌を一にする。

又、上代用例においては、表記法上の制約がその主なる原因とはいえず大むね韻文中心であるのに対して、中古においては韻文、即ち和歌に用例をみることが少ない。歌集・歌合・歌論書の類は

後日別途考察することとし、物語・日記・随筆の類を考察の対象としていること前述の如くであるが、当代の物語・日記の類は私家集と大同小異の性格のものもあり、いずれの作品にも相当量の和歌を含んでいるにも拘らず、対象とした前掲二〇資料の範囲では当該表現形式を和歌に見出すこと極めて少なく、伊勢物語に一首、大和物語に一首の計二首をみるのみである。又、試みに古今集をひもといてみても、次の二首を見出すのみである。

君をのみおもひねにねし夢なれば我心からみつるなりけり  
(卷十二、恋二、六〇八、みつね)

。あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる  
(卷十五、恋五、七五六、いせ)

その他、和歌の用例も見出されないではないが、なお圧倒的にこの表現形式は地の文のものであると考えざるを得ず、和歌の修辭法として定着しているとはいえない。

この表現形式は口頭語(会話文)の中でもさほどの展開をみせず、韻文の世界にも根づかず、結局、草子地の述部強調表現として固定化したと考えられる。中古初期には口頭語の世界にあり、中期それが草子地に多く用いられることによって文章語化し、形式的にも類型化・固定化が始まる。具体的にいえば、源氏物語以降は固定化し、新鮮味と叙述力を失なって沈滞し、用例数も減少してゆくようである。この文章語化の現象は榮花物語上・今昔物語集などにおいても顕著である。一般に源氏語以降の和文資料ではその文章洗練の方向と単純な繰返し法であるこの表現形式の性格とが一致せず、この表現形式は次第に排除される方向に動いたであろう。源氏物語以降の和文資料における用例の少なさがそれを物語っているといえよう。蜻蛉日記以来の和文の表現法は洗練

を宗とし反復を避け異語をもつていいかえを工夫していることが観察される。同語の近接反復が多いことが蜻蛉日記の文章の特徴としてあげられているが、逆にいえば、それが特徴といえるほど一般に同語反復を避ける傾向にあるといえるわけである。しかしその同じ性格が、単純な、しかし力強い表現を宗とした叙事文学——栄花物語上巻や今昔物語集の性格と一致してこれらの作品に比較的多い用例数を見出す結果になったのであろう。(第一表参照)

源氏物語以降、草子地の述部強調表現として用いられるようになり、形式的にも慣用語法的に類型化・固定化して、その表現形式の単純さ、素朴さ及び慣用性がそのまま己れの首をしめることになって衰微の因を作ったとみられるが、まがりなりにもこの慣用語法がのりかかり得たのは反復強調・累加強調を有効とする場面、すなわち破局場面である。中古初頭、竹取物語に、かぐや姫昇天の場——天人の迎えに対して帝の兵が何らの力も發揮し得なかった場面に現われて以来、例えば源氏物語においても、密会・姦通・露見・垣間見など何らかの意味で危険とスリルを伴う場面にこの表現形式はあらわれている。この傾向は結局この表現形式の表現価値として後代まで随伴し、今昔物語集に至っても一つの大きな表現上の特徴となっている。(拙稿「今昔物語集における同一動詞反復形式管見——『に』を介する形式について——」語文研究第三十六号、昭四九・八参照)

#### 四

「ただ泣きに泣く」如き表現形式が上代から中古を経て院政初期——今昔物語集に至るまでの様相の流動の過程を辿り、その要

「に」を介する同一動詞反復形式の流動(山口)

因を考え、その流動を許し、助長した言語場を想定してみた。残された用例の分布の物語る事実をできるだけ素直に解してこの表現形式の内因的な道行きを考察してみた次第である。

ここにはある一つの述部強調表現が、その表現形式の装いをかえつつ、歌謡の世界から口頭語の世界を経て文章語化し、そして再びその類型的ではあるが素朴な表現の力を説話文学の中で復活するらしいところまでをみた。栄花物語上巻及び特に今昔物語集にみる用例数の多さは、和文世界では生き得なかつた素朴単純な力強さが説話文学という叙事文学の世界において復活し得た事実を示しているかの如くであり、更に平家物語に至って再び口頭語性を復活し、叙述性・修飾性を強めてよみがえる如くである。この表現形式が再び力を与えられるためには、口頭語の世界の中で生き直す必要があつたものと考えられるが、この点は次稿を期したい。

#### 註

- ① 「ただ開き」が一語化していたとみて「ただ泊てに……泊てむ」(万・八九四)、「ただ行きに……行きて」(源、東屋・大成本、一七九九ページ行)、「只来ニ米レバ」(今昔二八—44)などの諸例とともに「たゞ——」の部分で複合語とみる山口堯二氏の説(「動詞の重複形式について——『に』『と』を介する形式を主に——」国語国文第二九卷第六号、昭三五・六)。「ただ」の機能の係り方が「に」の下接部分には及ばず、「ただ」を上接する「動詞+に」は後の動詞に対する強調として程度量副詞的に用いられているとみる井上博嗣氏の説(「中古の程度量副詞『ただ』の機能の在り方——源氏物語・今昔物語集の用例を資料として——」女子大国文二十六、昭四六)などがみられる。

- ② 中古に見出した計一七七例のうち、「花咲みに咲む」如き、表現類型、5・6型は計一六例である。
- ③ 上代資料の風土記、中古資料の埴中納言物語・栄花物語下の三作品には、用例を見出さなかった。調査のテキストは、宣命(国民古典文庫所収続日本紀宣命)以外は日本古典文学大系本を使用した。引用本文はこれに従う。
- ④ 上代においては、本文中例文をあげるタダ二例以外はすべて、「イヤ」、中古は落窪の一例以外すべて「タダ」、院政期の今昔物語集に至って「イヨイヨ」二例「マスマス」一例がみえる。
- ⑤ 時代別国語辞典・上代篇の記述による。日本国語大辞典(小学館)も同じ。
- ⑥ 時代別国語辞典・上代篇「いや」の項には、計三六に及ぶ複合形があげてある。
- ⑦ 伊勢物語は本文にあげる二例の他は、16段「いやまさりにのみおぼえつゝ」(147ペ)、103段「いやはかなにもなりまさる哉」(172ペ歌)、「心ざしはいやまさりけり」(173ペ)。落窪物語は本文の一例の他、「いやまさりなり」(224ペ6行)。蜻蛉日記、「いみじき雨いやまさりなれば」(246ペ5行)。
- ⑧ 万葉集の「いや」の表記と用例数、伊也9、伊夜35、伊野1、射矢1、彌40、益14、移夜1。
- ⑨ 万葉集には例をみぬが、記紀にみる「いや果てに」などは、この例とみられる他、記紀には、この(3)の意と思われる例も多い。
- ⑩ 万葉集中の「ただ」の表記と用例数。「ただ」多太4、正1、直20、但3、唯1、多大1、「ただに」多太爾6、多陀爾1、直二2、直爾4、直25、正7、徒1、唯1。
- ⑪ 森重敏「修飾語格小見―上代の助辞』な、に、の、が』―」(一)、(二)、(三)、国語国文第一七卷第一、二、四号、昭三三年二、五、七月)
- ⑫ 注(1)にあげた井上博嗣氏論文に同趣の規定がある。
- ⑬ これらの作品においては、会話文の部分が地の文にひかれて地の文的になっているという全く逆の考え方も可能ではあるが、平安朝源氏物語に及んでも、地の文と会話文の間にそれほど大きな隔りはないとする通説に従う。
- ⑭ 本来的にタダはタタであったことが、類従名義抄の記述などから知られている。
- ⑮ 注(1)にあげた井上博嗣氏の論文に詳しいが、「ただ」に文末の陳述作用に係り結ばれる機能がないとはいきれない面があり、それが、「ただ」の係り方を曖昧にし、例えば、「ただ泣きに泣く」において「ただ」が「泣きに泣く」全体を修飾するかの如き印象を与えるのであろう。
- ⑯ 至文堂「新版日本文学史」8「年表」によると、歌経標式(藤原成七七二、数字は西暦年、以下同じ)、唐大和上東征伝(淡海三船七七九)、高橋氏文奏上(七八九)、凌雲新集(八一四)、文華秀麗集(八一八)、日本霊異記(景戒八二二)、経国集(八二七)、性霊集(八三五)などがみえる。
- ⑰ 「平安朝文学事典」岡一男編によれば、仁和元―三年(八八五―七)、「在民部卿行平歌合」が本文の現存する歌合の嚆矢。九世紀半ば以前に遡る歌合は存在しなかったらしい。
- ⑱ 「……ただ弱りになん弱らせ給ふめりし」繪角、大系本四、467ペ4行、大君他界の直後、女房たちが噂ばなしをする中の女房のことばにみえる。
- ⑲ 芦辺より満ち来る潮のいやましに君に心を思ひます哉(伊勢33段)  
・水隠れに隠るばかりの下草はなからじとも思ほゆるかな(大和、138段)
- ⑳ 若干例をあげてみると次のような例をみる。歌番号は正統国歌大観。  
・桜花ふりにふる共見る人の衣ぬるべき雪ならなくに(貫之集、一七七〇九)

- ・神無月時雨と共に神なびの杜の木の葉はふりにこそふれ（後撰集、卷八、四五二、読入しらず）
  - ・ありとのみ音羽の山の時鳥きゝにきこえてあはずもある哉（後撰集卷四、一五八）
  - ・をらで唯かたりに語れ山桜風にちるだに惜しきにはひを（後拾遺集卷一、八五、盛少将）
- ⑳ 大西善明 「蜻蛉日記研究覚え書きその一」（平安文学研究20輯）、木村正中 「蜻蛉日記本文批判の方法」（国語と国文学、昭三四年二月）、伊半田経久 「かげろふ日記上巻の表現と構成」（言語と文芸七―三）。